

## 「危機に直面して」

長尾 真 元京都大学総長

みなさんこんにちは。今日は「危機に直面して」というテーマで話をさせていただきます。今我々は新型コロナウイルスとの闘いの真ただ中にあるわけであり、このなかでこの闘いの最前線で、身の危険にさらされながら医療や看護、それらに関連した仕事に日夜奮闘してくださっている方々のご努力には本当に頭が下がる思いでございます。私どもはこの闘いに直接的には何もできないのですけれども、間接的に我々ができることはいろいろあると存じます。例えば我々は国が出している指針に沿ってなるべく外出しないようにして感染しないように、また他にうつさないようにしなければなりません。そうしなければ、パンデミックを收拾できませんし、医療や看護の方々の負担を増大させ、医療システムの崩壊を引き起こしてしまうこととなります。このような異常な世界状況の中で、我々がどうしなければならないかについて一人ひとりの立場から深く考えることが必要でしょう。今までに経験しなかったこのような事態にどう対処するかというとき、我々はあくまでも正しい科学的知識に従って行動をしなければなりません。危機になればなるほど一人ひとりの精神力、あるいは道徳心が試されているということにもなるわけであり、

私の父は明治の終わりの頃の生まれでしたが、生前は、私たち子どもに対して次のようなことを言っておりました。それは、長い人生を何事もなく平穩に過ごしてきていると思っても、こんな幸運には滅多に恵まれないのだ、長い人生には必ず二度三度か予想もしない厳しい状況に晒されるのだ。このときにどう振る舞うかがその人の価値を決めるのだ、と言っておりました。その時のために平時から自分を精神的に鍛えておく必要があるというわけであり、つまりいざという時でも、慌てず、人間が人間としてまっとうに生きていくということ、常日頃から考えて毎日過ごさねばならないということです。

私の父の場合の危機は、1923年の関東大震災であり、1945年の第2次世界大戦の日本の敗北の時でありました。特に後者の場合は、日本中の人たちが飢えや食わずの状況に追い込まれ、私どもは、米や麦などはほとんど口に入らず、食べ盛り育ち盛りの子供時代を、自宅の庭を掘り返して育てたサツマイモやカボチャなどで飢えをしのぐという何年かを過ごしたのでした。第2次世界大戦で敗北したとき、すべての人は茫然として、これからどう生きていったらよいのか分からなくなってしまったんです。その中で当時、京都大学の総長をしておられました鳥養利三郎先生は、学生たちを集め、こういうときこそしっかりと勉強してこれからの日本を再建するのだ、今は君たちの肩にかかっているんだよと訓示なさったと聞いております。

この新型コロナウイルスとの闘いの今、勉強に励んでいる学生諸君、また我々学問研究に従事している者として、何をなすべきなのでしょう。今は勉強や学問研究は十分にはできませんが、幸か不幸か時間だけは十分あるという状況です。従ってこのときこそ、それぞれが自分がやっている勉強、学問研究が何のためにあるかということについて真剣に考える絶好のチャンスであると考えます。これを哲学の一課題として哲学者に任せておくのではなく、それぞれ自分がやっていることについての人生における意味、社会における意味、人類にとっての意味といったことを、時間をかけてよく考えてみることをおすすめいたします。良い就職先を見つけるためにとか、あるいはたくさん論文を書いて有名になろうとか、そういったことではなく、自分が世界の一員であることをよく考え、自分としてできることを実行しながら、まじめに生きることに専心すべきではないでしょうか。

学問研究には好奇心が必要だ、好奇心があるからこそ新しいことが考えられ、学問が進歩するのだとよく言われます。それは正しいでしょうけれども、その逆は成り立ちません。つまり好奇心さえあれば何をしてもよいかといえれば決してそうではないということです。これをよく考えねばなりません。そのために教養と道徳心が必要なのであります。

2011年3月11日東北地方で起こった何百年に一度の大地震と、それに伴う想像もできない原子炉の事故という未曾有の災害が発生し、多くの方が亡くなり、被災者の方々は茫然とし、日本中の人たちが大きなショックを受けました。そして救援物資を送るとか、寄付をするとか、それぞれが自分にできることをいたしました。私はそのとき国立国会図書館長をしておりましたけれども、国会図書館として何ができるか、何をしなければならないかを真剣に考えました。そこで立ち上げた仕事は二つありました。ひとつは津波などで損傷を受けた貴重な古文書などの古い資料の修復のお手伝いをするということでした。被災地の図書館の方々は懸命になって流された貴重な資料を集めておられましたけれども、塩水をかぶった古文書を洗浄し、うまく修復する作業は大変なことでありました。そこでそのような資料を国会図書館に持ち込み、洗浄、修復することをしたのであります。もうひとつは、この何百年かに一回の巨大災害についての記録を徹底的に集め、また何世紀か後に起こるであろう同様の災害に備えられるようにすることでした。大震災に関するあらゆる記録といっても地震や津波の記録だけでなく、被災状況の詳細な記録、救援活動に関する記録、東北地方の生産活動や経済活動についての損失、損害、あるいはその復旧、復興の状況の年次的推移、あるいは日本全体の経済状況への影響等々、非常に広範な記録を対象にしなければなりません。これらは国会図書館だけでは到底やれませんので、政府の関係する各省庁に呼びかけて協力体制を作り、実行に移しました。この仕事は長年を要しましたがけれども各省庁で電子ファイルとして作られ、国会図書館の「ひなぎく (<https://kn.ndl.go.jp/>)」というサイトにアクセスすれば、必要な記録を蓄積している省庁のデータベースから取り出せるようになっていきます。この膨大な資料は将来起こるであろう大災害のときの参考になるでしょう

し、単に日本にとって役に立つだけでなく、世界各国の大地震、大津波などの災害を少しでも減らすために、貢献するものと考えております。今回のパンデミックについても同様の努力が必要ではないでしょうか。

昔の人たちは、天変地異が起こったときは神に祈り、病気なども、平安時代の加持祈祷はその典型的なものであります。今日ではいざという時は科学技術、医学に頼るわけでありませぬ。しかしこれだけでは今回のコロナウイルスの災害には勝てません。いざという時に頼りにすべき医療が崩壊の危機に瀕しているからであります。このパンデミックができるだけ早く収束するよう我々一人ひとりがコロナウイルスに立ち向かうのだという信念をもって自己を律していくことが必要になります。

江戸時代の寺小屋は読み・書き・そろばんを教えました、そのほかに人間としてあるべき姿も儒学などを通じ教え、実践しました。このように江戸時代の学問は、人間をつくるためのものであります。今日の学問研究にはそのような要素が全くと言っていいほど欠けております。人間はいかにあるべきか、何のために勉強し、学問研究をしているかということをおこの際よく考えることが大切ではないでしょうか。

皆さん方はなるべく家から出ない、あるいは人に会わないといった日々でしょうが、時間だけはたっぷりありますから、繰り返しになりますけれども、こういう時こそ、ものごとの本質についてよく考える貴重なチャンスであるわけです。これを実践することによって、自分の勉強や研究の方向性が改めてはっきりしたり、問題解決の糸口に気が付いたり、新しい魅力的な研究テーマが見つかったりするものなのであります。

最もこの間には自分の緊張をほぐすために、自分の本来の勉強や研究には全く関係のない分野の本を読むこともおすすめいたします。例えば、中国古典の陶淵明の漢詩集とかシェイクスピアあるいはハイネ、ヘルマン・ヘッセなどを讀んだり、アンデルセンの童話などを子どもたちに読んであげるといったのもいいのではないのでしょうか。先般ノーベル化学賞を受賞されました吉野彰氏で有名になりましたファラデーの「ロウソクの科学」や寺田寅彦、中谷宇吉郎などもいいのではないかと思います。このように自分の仕事に全く関係のないものを読むことによって、長期的、また世界的な視野が得られますし、自分の世界が広がり、これからの人生のヒントが得られることもあるのです。

人の絶望した心に勇気を与えてくれるものは音楽であります。ベートーベンは心を励ましてくれますし、多くの管弦楽曲や歌などは人の心を慰めてくれます。人の心を一つにしてくれるのも音楽です。すべての人の心を一つにすることは現代社会においては大変難しいことでもありますし、場合によっては危険なことでもあります。しかし今回のパンデミックの

状況では、皆が協力しなければウイルスとの闘いは勝てないことは明らかです。多くの人たちの苦しみ、生死の境をさまよっているという事実を直視すれば、我々は自ずと祈らざるを得ない気持ちになるでしょう。人の心を最終的に救ってくれ、支えてくれるものは、残念ながら科学的知識ではなくて、心の底から出てくる祈りであり、音楽で言えば、ヨハン・ゼバスティアン・バッハであるでしょう。こういうこともよく考えていただきたいと存じます。

最後に、現在世界のすべての国が、コロナウイルスの被害を最小限度に抑えながら国民の健全な日常生活と経済をできるだけ早く回復すべく懸命の努力をしている中で、我々一人ひとりの努力は微々たるものかもしれませんが、これがワンチームになることによって大きく力強いものとなり、この闘いを終結させることができるのですから、国を越えてお互いに頑張らねばならないと思います。

冒頭にも述べましたが、医療や看護に、日夜懸命の努力をしていただいている方々に感謝をしながら私の拙いお話を終わらせていただきます。どうぞよろしくおねがいたします。どうもありがとうございました。

【第5回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム  
開催日時： 令和2年4月24日（金） 11時～13時  
主催：国立情報学研究所 大学の情報環境のあり方検討会  
<https://www.nii.ac.jp/news/2020/0325.html>